

第10回「社会・意識調査データベース (SORD)」 ワークショップの開催

The 10th Workshop of Social and Opinion Research Database Project (SORD)

社会・意識調査データベース作成プロジェクト 高橋 徹

第10回「社会・意識調査データベース (SORD)」ワークショップを2002年3月24日(日)13:30～17:30、本学G館特別会議室において開催した。ワークショップでは、社会調査にかかわる研究・教育の現場から、社会調査データの管理と活用の問題を考える視点を中心に議論が展開された。

SORDメンバー以外からは、東京都立大学の玉野和志氏を招き、「日本におけるサーベイ調査の導入とデータ管理の現状」というタイトルで報告をしていただいた。玉野氏は、都市社会学における調査事例(磯村英一らによる戦後の特殊飲食店女子組合員調査)を取り上げつつ、調査データにかかわるデリケートな論点にふれ、さらに日本の社会学におけるサーベイ調査の導入の歴史的経緯をふりかえった。そのうえで玉野氏は、日本の社会学における調査データの管理・活用の意識の低さを指摘し、今後の課題として、社会調査が具体的な社会問題解決を志向し、わかりやすくその結果と意義を伝えることを挙げている。

SORDメンバーから、立教大学の是永論氏が、「マスコミュニケーション研究とデータ管理—データ収集と分析過程に関する再現性をめぐって—」と題して報告をおこなった。是永氏は、東京大学出版会からその成果が刊行されている「日本人の情報行動調査」を事例として、データの管理や処理の問題につい

て論じた。また、社会調査をひとつの認識生産プロセスとして把握し、そこから調査票の作成やアーカイブ化の意義について指摘がなされた。

SORD事務局からは、札幌学院大学の中澤秀雄が「SORDデータからみる社会調査の趨勢」として、これまでにSORDが蓄積してきたデータを素材として、日本においてなぜこれまでデータ・アーカイブが発展してこなかったのかという問題を軸に、社会学における社会調査の動向とそこにみられる諸問題を論じている。

各報告者の論旨について、詳細は、本誌掲載の論考にゆずるが、以上の報告に刺激されて、当日の議論の中で様々な角度から意見が表明された。社会的な社会調査における実践性の希薄さについては教育プログラムの問題が、最近20年に個人レベルの社会調査が増加している点については、外部委託の容易さ(これに関連して、社会調査の主流が地域定着型の調査から、ランダムサンプリングなどによるサーベイ型調査へ移行したのではないかとの指摘もあった)、さらに統計パッケージの使いやすさ、理論研究の退潮、などの諸要因が指摘されている。

また、今後の課題として、調査データの公開に向けてどのようなインセンティブが用意できるのか、2次分析の重要性をどのように高めるのか、具体的な社会問題の解決を志向する実践的な調査・分析技術をどのように普

及させるのかといった点が挙げられた。

なお、当日のプログラムは、次の通りである。

(プログラム)

●学部長挨拶

秋山雅彦 (札幌学院大学社会情報学部)

●報告 13:30-16:30 司会：佐藤和洋

① SORD データからみる社会調査の趨勢

中澤秀雄 (札幌学院大学社会情報学部)

②日本におけるサーベイ調査の導入とデータ

管理の現状

玉野和志 (東京都立大学人文学部)

③マスコミュニケーション研究とデータ管理

理：データ収集と分析過程に関する再現性をめぐって

是永 論 (立教大学社会学部)

●全体討論 16:30-17:30 司会：高橋 徹

コメンテータ：

小島秀夫 (茨城大学教育学部)

稲葉昭英 (東京都立大学人文学部)